小学校　社会科　部会

部会長　勾金小学校　　校長　髙瀬　光一
実践者　中元寺小学校　教諭　中村　紀幸

1　研究主題及び副題

思考力・判断力・表現力を育む社会科学習指導
～資料を活用し自分の考えを発展させる言語活動の充実を通して～

2　主題設定の理由

（１）社会的な背景から

刻々と変わっていく日本の政治・社会情勢、東日本大震災など相次ぐ自然災害、更には高度情報化や国際化など、現代社会は非常に激しい変化の中におかれている。その中にあって、これらの変化に対応できる力、生涯にわたって学び続ける力、自分の力で生き抜いていくことのできる力、すなわち「確かな学力」の育成が重要となってくる。そのため、社会科では学校教育を通じて「日本や世界の諸事情に関心をもって、多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度の育成」を大きなねらいとして掲げている。また、OECD の PISA 調査や全国学力・学習状況調査において、わが国の児童生徒については、思考力・判断力・表現力等の読解力を問う問題や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題が見られた。特に、全国学力・学習状況調査では、国語科、算数科とも知識・技能を活用する力すなわち、思考力・判断力・表現力等に課題があることが指摘され続けている。そこで、これからの社会を主体的に生き抜いていく児童の育成には、「思考力・判断力・表現力を育む」ための学習活動・学習支援の工夫が重要であると考えた。

（２）新学習指導要領改訂の趣旨から

今回の新学習指導要領の改訂では、「言語活動」の充実が示されたことは、大きな特色の一つである。小学校学習指導要領解説社会編にも「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得し、これらを活用して課題を解決する力を身に付けていくためには、地図や統計などの各種の資料から必要な情報を読みとる力、社会的事象の意味、意義を資料をもとに解釈する力、事象の特色や事象間の関連を説明する力、自分の考えを論述する力などが必要である」ことが説明されている。このように、社会科における活用する力や課題を探求する力、すなわち、思考力・判断力・表現力を身に付けさせるための大切な役割として言語活動を位置づけることは重要である。

（３）児童の実態から

本学級の児童は、学習において自分の考えを文章や図で表現し、それらを使ってまわりの児童に説明することには慣れている。しかし、説明の内容は独りよがりなところが多く、資料を正確に読みとり読みとったことを根拠として相手にわかりやすく論理的に伝えようとする意識は低い。このことは、全国学力・学習状況調査の国語科 B 問題において「目的や意図に応じ、必要な内容を適切に引用して書く」項目や「目的に応じ、複数の内容を関係付けながら自分の考えを具体的に書く」項目において著しく正答率が低い結果からも伺われる。自分の考えを正確にわかりやすく相手に伝えるためには「どのように資料を活用すればよいのか」「どのような内容や準備が必要なのか」などを考えさせ、それらをもとにして自分の考えを整理させていくことが大切である。

また、相手の意見に対して反応することが少なく、相手の意見と自分の意見を関連付けて考え直そうとするところがほとんど見られない。そこで、様々な情報からそれらを根拠にして自分の考えを生み出したり、交流活動を通して自分の考えを相手にわかりやすく伝えたり、相手の考えを聴きながら新たな考えや疑問を生み出す活動は、大変意義深いと考える。

以上のことから、社会科学習の中で言語活動を生かし、相手に論理的に説明できる力を高め、自らの考えを発展させていく学習指導の在り方を探っていくことは、意義深いことであると考える。

3　主題の意味

（1）思考力・判断力・表現力を育むとは

単元や授業において、基礎的・基本的な知識・技能を習得させながら、これらを活用して課題を解決するために必要とされる能力が、思考力・判断力・表現力である。思考力とは、必要な情報を取捨選択し、それらを関連付ける中で自分の考えを作り上げる力である。判断力とは、今までの経験や収集した情報をもとに決断していく力である。その決断には、必要な情報をもとにして、自分なりの確かな根拠をもっていることが必要であり、確かな根拠をもち自分の考えを作り上げる過程において思考力が発揮される。表現力とは、思考・判断したことを話したり書いたり、まとめたりして、自分の考えを表していく力であり、習得した知識・技能を活用しながら考えたことを説明したり、自分の意見としてまとめたりする力である。つまり、三つの力は一つ一つ切り離して考えるのではなく、関連する能力として総合的にとらえ育成していくことが重要であると考える。

（2）資料を活用し自分の考えを発展させる言語活動の充実を通してとは

「資料」とは、問題を解決するために、その結論を導くための根拠となるものである。グラフや表、文章、地図、図、写真、実物など、様々なものが考えられる。児童自らが見つけだす場合もあるし、教師から与える場合もある。児童自ら発見する場合でも、教師が与える場合でも、ただ量を求めるのみではなく、見通しをもって選んだり探したりせねばならない。

「資料を活用し」とは、学習問題の解決に向けて、必要な資料を正確に読みとること、読み取ったデータを分析し説明すること、さらにはそれらをもとに自分の考えをつくり出すことであると考える。

「自分の考えを発展させる」とは、自分で調べたり、自分が知った事実や課題解決に向けて自分なりに分析したこと、思考したことなどを根拠として、今までの自分の考えを修正したり、自分の考えに付加したりしながら新たな自分の考えをつくりだしていくことである。

「言語活動の充実」とは、児童の実態や単元、学習する場所などいろいろな要素を考慮して、適切な言語活動を選び、活用していくことである。様々な言語活動を学習において使い分けて指導することが大切であり、このような言語活動を充実させることが、思考力・判断力・表現力を育むために必要である。

なお、授業における各段階の基本的な言語活動を以下のように位置づける。

〈導入の段階〉

・資料を読み取り課題へとつなげる。

〈展開の段階〉

・学習課題の追求や解決に必要な情報を集めたり、読み取ったりする。

〈まとめる段階〉

・情報を整理しまとめ、社会的事象の様子を理解する。

・情報を整理したりまとめたりすることで、比較・関連付け・総合などの思考をはたらかせ、社会的事象の意味や特色、相互の関連を考え、理解する。

4　研究の目標

社会科における思考力・判断力・表現力を育成するための具体的方策として、課題を解決するために、適切に資料を選択活用し、それらをもとに解決のための根拠を見いだし、自分の考えを付加修正しながら新たな考えをつくりだすための支援のあり方を探っていく。

5　研究の仮説

社会科学習指導において、下記のような方策を取り入れれば、子どもの学習意欲は高まり、思考力・判断力・表現力を養うことができるであろう。

① 問題解決的な学習につながる学習課題の設定
② 児童が主体的に追求するための地域資料の活用
③ 考えを発展させていくためのつながりをもたせた言語活動の設定

6　研究の計画

（１）単元名　　「幕府の政治と人々の成長」

（２）単元の目標及び指導計画

単　元	幕府の政治と人々の成長	総時数	７時間	時期	７月
単元の目標	○　江戸幕府の支配体制や社会の様子に関心をもち、身分制度や外国との関係などについて意欲的に調べることができる。　（関心・意欲・態度） ○　江戸幕府の支配や人々の暮らしについて学習問題を見いだして追求し、調べたり考えたりしたことを適切に表現することができる。（思考・判断・表現） ○ 江戸幕府の支配のしくみや人々の暮らしについて、写真や地図、年表、地域資料などの資料を活用して調べることができる。（技能） ○　江戸幕府の支配体制と身分制度や、外国との関係などについて理解することができる。（知識・理解）				

次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(援助・支援)
1	1	江戸幕府の政治のしくみや社会の様子について学習課題を設定することができる。	大名行列の想像図から疑問に思ったこと、調べたいことを整理して、学習計画を立てる。	絵を読み取って気がついたことや疑問に思ったことが、人々の関係とどうつながっているかを予想させる。
	1	江戸幕府の大名支配のしくみを理解することができる。	大名配置の地図の読み取りをきっかけに幕府が大名を支配するために行ったことを調べ、江戸幕府と大名の関係について考える。	全国の大名の配置や武家諸法度のそれぞれの項目からわかることを振り返らせながら考えさせていく。

2	1	鎖国政策の特徴や国内に及ぼした影響をとらえることができる。	地図や出島の絵から江戸時代の外国との交流について関心を持ち、鎖国までの流れを調べるとともに鎖国した理由を考える。	キリスト教をキーワードに考えさせる。 貿易の利益を幕府が独占したことで、幕府が全国を支配するしくみが強化されたことに気づかせる。
	1	鎖国政策のもとでも、施設の行き来や交易を通してつながりをもっていたことに気づくことができる。	鎖国のもとでのオランダや中国以外の他の国や地域との交流や朝鮮・北海道・沖縄との交流の様子についてまとめる。	地図や読み物資料をていねいに読み取らせる。
3	1	身分制度のもとで、人々がどのような暮らしをしていたのかをとらえることができる。	百姓に対する御触書や人口の割合のグラフなどから、幕府がどのような制度で人々を治めたのか考える。	なぜ身分制度が必要だったのか、どのような方法で人々を支配したかについて話し合い、学習課題を明確にできるようにする。
	1	田川では新しい農民の努力や以前からの農民と新しい農民の協力により、田畑がよみがえっていったことに気づくことができる。	資料の読み取りから、飢饉のために荒れた田畑が新しく農民になった人たちの努力により、よみがえっていった経緯を調べる。	何のために新しく農民になった人たちが田川に連れてこられたのかをはっきりさせる。
	1	身分制度と幕府や藩の支配との関係について、理解を深めることができる。	小倉藩の御触書や資料の読み取りから幕府や藩の差別政策に気づき、調べて考えたことをもとに話し合う。	身分制度自体の目的に気づかせるとともに、それを跳ね返そうとする人々の営みもあったことを理解させる。

7　指導の実際

（1）主眼

武士による支配を維持・強化させるために身分制度がつくられ強化されていったことを理解するとともに、そのような差別政策について自分なりの考えをもち根拠をもとにして意見を述べることができる。

（2）授業仮説

本時において、差別された身分がつくられ御触書が何度も出されたことの理由について資料を使って調べたり、調べたことをもとに百姓や差別された人々の立場に立って考えたりすることで、幕府や藩の身分制度に対する理解が深まり、自分の考えを発展させながら根拠をもとにして意見を述べる力を高めることができるであろうと考える。

（3）準備

教師：小倉藩の御触書（拡大）

児童：「光ある未来へ」（田川郡同和教育副読本）、小倉藩の御触書、ワークシート

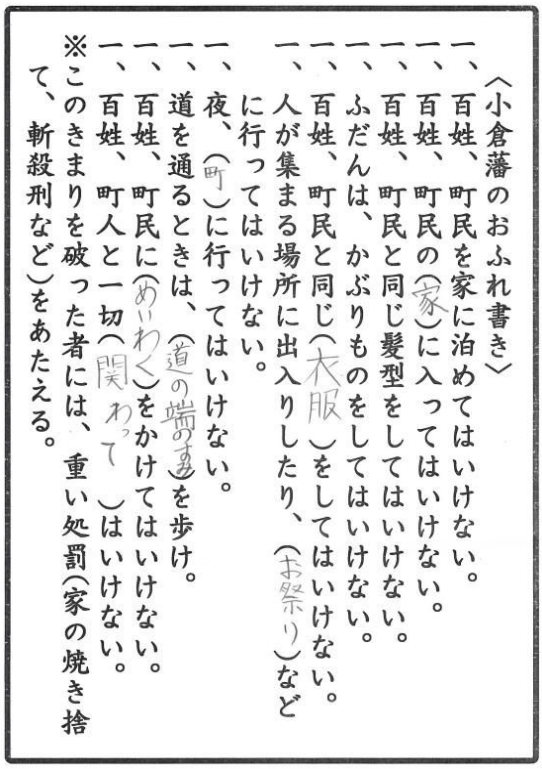
（４）展開

段階	学　習　活　動	○具体的な指導・支援　◎評価の視点
導入	1　小倉藩の御触書について考える。	○御触書の一部を隠し、隠れている部分を予想させる。 ○もし、自分たちがこのようなお触れを出されたらどう思うか考えさせることで、内容の厳しさを感じさせる。 ○これが誰に対し出されたものか予想させる。 ◎前時までの学習と関連させながら、誰に対して何のために出されたものなのかを自分なりに予想することができている。
	2　前時学習を想起し、本時のめあてを確認する。	○前時の最後とつなぎ、なぜ新しく農民になった人たちが差別される身分にならなければいけなかったのか、なぜそのような身分がつくられたのかという疑問を持たせる。
	めあて：なぜ差別された身分がつくられたのか調べ、そのことについて自分なりの意見をもとう。	
／展開	3　なぜ差別された身分がつくられ、その後どのような経過をたどっていったのか調べる。 (1)　つくられた理由について調べる。 ・農民の不満をそらす ・団結（一揆）をさせない ↓ 武士の支配	○「光ある未来」をもとに、課題について自分なりに調べさせていく。 ○読み取りが難しい児童については、「協力」「団結」「一揆」「支配」などのキーワードを示し、それに沿ってまとめさせていく。 ○書いてあることだけでなく、それをもとにした自分なりの予想も大切にさせていく。 ◎資料の読み取りをもとに、自分なりの予想や意見も入れてまとめることができている。
	(2)　調べたことを交流し合う。	○御触書が何度も出された理由についても交流させる。 ○なぜ別の村に住まわせたのか、調べたことをもとに考えさせる。 ○身分制度は武士の支配を続けることができるようにするための差別政策であったこと、しかし最初はお互いに協力し合っていた百姓と差別された人々は藩の政策には従わなかったことをきちんと押さえていく。
開	4　百姓や差別された人々の気持ちを考え交流する。 〈百姓〉 ・自分たちのために頑張ってくれた人々をなぜ差別しなけれ	○ただ気持ちを考えるだけでなく、なぜそう思うのかという根拠もしっかりもたせていく。 ○御触書が何度も出されているところから、百姓たちもこの差別政策に対して最初は従

	ばならないのか。 ・これからも協力していきたいのに。 〈差別された人々〉 ・何も悪いことはしていないのになぜこんなめにあうのか。 ・絶対にいやだ。ひどい。	っていない部分が多かった事実からも予想させていく。 ◎調べて分かったことを根拠にしながら、それぞれの立場に立って気持ちを考えることができている。
／まとめる	5　身分政策について自分なりの考えをまとめる。 ・政権を安定させるためにはしかたがなかった。 ・どんな理由があろうと絶対に許されない政策である。 ・他に方法があったのではないか。 6　本時学習のまとめをする。	○前時までの学習や本時で調べて新たに分かったことを根拠にしながら藩や幕府が行った身分政策について自分なりの意見を持たせる。 ◎今までの学習や本時で調べたり考えたりしたことをもとに自分なりの意見を持つことができている。
	まとめ：幕府や藩は自分たちの支配が続くように身分制度をつくったが、はじめはそれに従わずはね返していこうとする人々もいた。	

8　指導の考察

授業の導入段階では、一部を隠した小倉藩の御触書（現代語訳）を出して隠れている部分の言葉について児童に予想させていった。事前には、ある身分の人たちに対して藩から出された命令書であるという説明だけしかしていなかったが、児童たちは前時までの幕府の身分制度の内容や前時の田川における農民や藩と飢饉の話などからこれがどの身分に対して出されたものであるかを予想して意欲的に考えていた。予想を交流した後、これが前時に学習した新しく入ってきた農民たちに出されたものであり、これらの人たちが幕府の身分制度で学習した差別された人々という身分にされていったことを知らせていった。また、児童たちに、もし自分たちが同じようなきまりを与えられたらどう思うかを考えさせたが、同じ髪型や服装を禁止され、みんなが集まる場所にも出入りできず、しかもこれを守らなければ命をも奪う重い処罰を与えられることなどを通して自分たちでも絶対あり得ない厳しい内容であることを感じ取っていた。めあての提示とともに、前時の最後の課題であったなぜ別の村に住まなければならなかったのか、なぜこのような厳しい身分をつくったのかという疑問に対する予想を考えさせたが、何人かは協力させないためではない


〈小倉藩のおふれ書き〉
一、百姓、町民を家に泊めてはいけない。
一、百姓、町民の(家)に入ってはいけない。
一、百姓、町民と同じ髪型をしてはいけない。
一、ふだんは、かぶりものをしてはいけない。
一、百姓、町民と同じ(衣服)をしてはいけない。
一、人が集まる場所に出入りしたり、(お祭り)などに行ってはいけない。
一、夜、(町)に行ってはいけない。
一、道を通るときは、(道の端の方)を歩け。
一、百姓、町民に(めいわく)をかけてはいけない。
一、百姓、町人と一切(関わって)はいけない。
※このきまりを破った者には、重い処罰(家の焼き捨て、斬殺刑など)をあたえる。

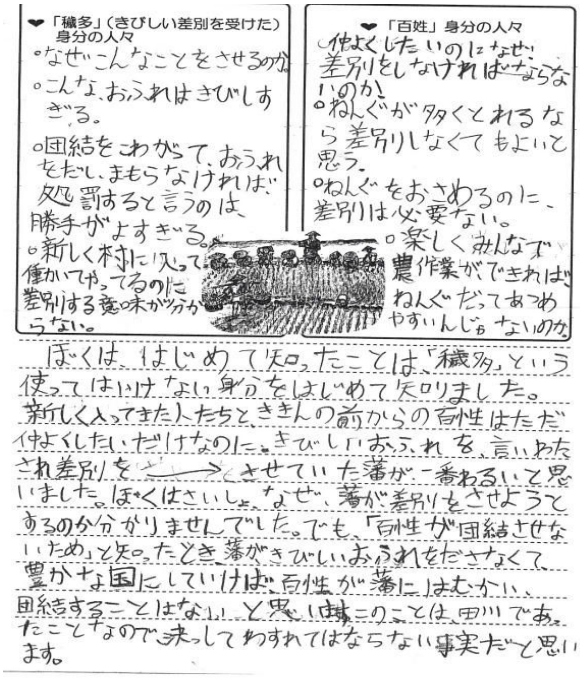
【資料1　小倉藩御触書の資料】

かという本質に迫る予想を立てることができていた。最初に実際の御触書を使って課題について考えさせていったことで、児童は自分たちの地域の歴史についての関心を高め一人一人がしっかりと課題を把握していくことができた。

次に「光ある未来」を使いながら課題について一人調べを行っていった。ほとんどの子どもたちが「人々が仲よくすると、団結して一揆を起こすとおそれていた藩は、団結させないために、差別させるためのおふれ（法律）を何度も出した」ことを正確に読み取ることができていた。このことは、幕府の身分制度のところで幕府が一番おそれたことが８割の人数を占める百姓の反抗（一揆）であったことの学習から関連させて考えることができている児童が多かったようである。調べたことを交流していく中では、なぜ何度も御触書が出たのかということも考え合っていったが、今まで協力してきた仲間としての立場からすぐに差別するような意識にはなれないという意見が出ていた。児童たちは、調べたことを根拠にしながら自分なりの予想を立てていくことができていたと言える。また、差別された人々をつくった身分政策の目的が、苦しい生活を強いられていた百姓の不満をそらすことにもあったことについても、以前のいじめについての道徳の学習をもとにして予想することができた児童がいた。このことも、考えたことを交流することを通して全体の意見としてまとめることができていった。

調べたり予想したり友だちの意見を聞いたりしてわかったことをもとに、差別された人々と百姓の気持ちについて考えていった。ここも、ただ想像するだけではなくもし自分だったらという立場で考えること、勝手な想像ではなく調べたりわかったりしたことを根拠にして想像していくことを押さえて考えさせていった。やはり、いくら政策を安定させるためとはいえ、あまりに差別的な生活を強いられることへの不満や怒りを想像するものがほとんどであった。また、百姓の立場に立ってみても、今まで自分たちのために努力しいっしょに協力してきたのに、なぜいきなり差別しなければならないのかわからないという気持ちがほとんどであった。このことから、御触書が何度も出され、きまりの徹底がなかなかできていかなかった事実を根拠にして想像できたことを伺うことができる。

最後に、「身分制度」の学習のまとめとして、幕府や藩の立場と支配される側の立場を考えながら幕府や藩が行った身分制について自分はどう考えるのかまとめていった。やはり、いくら政権を安定させるためとはいえ、現代からすると受け入れがたい非人間的な差別政策に対して反対する意見が全てであった。ただ、その中でも、支配していうことをきかせるだけでなく百姓や差別された人々との信頼関係を築くことで長く政権を維持させた方がよいという意見があった。これは、今までの歴史や道徳の学習、これまでの自分の学校生活の様々な経験から学んだことを加味した意見と言える。また、地域の資料をもとに学習してきたことから、ここで学習した田川の歴史や事実を現在そこに住んでいるものとして決して忘れてはならないという意見も出されていた。やはり、前時までの学習も含め、課題設定から資料による読み取り、立場をきめての想像や交流等、それぞれの段階で調べたり表現したりする言語活動を設定して



【資料2　まとめのワークシート】

いったことで、最後に自分の考えを発展させながら、調べたり学習したりしたことを根拠に自分なりの意見をもつことができていったと言える。

９　成果と今後の課題

〈成果〉

○　身分制度についての学習を小単元とし、はじめに幕府の身分制度の内容や人々の暮らしについてを知識として習得させ、２時間目、３時間目にそのことを活用させながら地域の様子について調べていく活動を取り入れたことで思考を深めるような活動につなげることができた。

○　地域の歴史についての素材や資料を活用したことで、児童は自分たちの地域で実際に起こっていた事実に関心を高め、意欲的に調べ活動に取り組んでいくことができた。

○　資料の読み取りからの課題設定→課題解決のための情報収集・整理→調べたことを根拠とした自分の意見の選定という段階を経たことで、児童に自分の考えを発展させながら自分なりの意見をもたせることができた。

○　それぞれの立場（差別された人々、百姓）に立たせて気持ちを想像させたことで、すぐには政策通りにはいかなかったことを実感をもって理解させることができた。また、身分制に対する自分の意見を持つ材料にすることができた。

○　交流活動を仕組むことによって、相手意識を高めるとともに、考えを深めさせていくこともできた。

〈課題〉

●　小倉藩の御触書以外にも当時の身分制度や身分差別の実態を示す資料はたくさんあり、今後、より資料活用の能力を高めるためにも様々な地域資料の開発が必要である。

●　資料として「光ある未来」からの読み取りを行ったが、読み物資料であったために藩が身分制度を定め強化していった理由がそのまま書いてあり、予想したり類推したりすることがなかった。グラフや表から数値で考えたり、年代を推移させた資料から考えたりなど比較したり関連付けたりする思考になるような資料の活用が必要である。

●　交流活動は活発に行えるものの、相手にわかりやすく効果的に伝えようとする意識や技術はまだ低い。今後、より相手意識をはっきり持たせ、思考・判断活動と連動させた表現活動を考えていく必要がある。

●　単元全体において振り返りや評価が十分にできていない。どこの段階でどのような評価をしていくか、そしてそれをどう分析していくかなど検討していかなければならない。

◇　参考文献

・小学校指導要領解説　社会編　（文部科学省）
・小学校学習指導要領の展開　社会編　（明治図書）
・言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】　（文部科学省）
・添田町小・中学校人権・「同和」教育プラン 教材資料集　（添田町教育委員会）